

聖餐礼拝説教要旨 【2012年9月9日】

「あなたがたを休ませてあげよう」

イザヤ書
マタイによる福音書

第40章27節～31節
第11章28節～第12章8節

説教 村上修平牧師

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」(マタイによる福音書 11章28節) 普段の生活で苦労し、疲れている者にとって、「休ませてあげよう」という御言葉は何よりの慰めです。本当に疲れている時、かえって眠れない事があります。横になっても心にかかる問題や思い煩いによってゆっくり休めない事もあります。『休む』という事は案外難しいものだと思います。しかし、この御言葉をよく読むと、まず「わたしのもとにきなさい」と言われている事が分かります。そして、原文を直訳すると、『(そうすればわたしが)あなたがたを休ませてあげよう』となっているのです。つまり、これは主イエスの招きの言葉なのです。

主イエスは、私たちが全ての思い煩いや心の重荷や罪を抱えたままで、主イエスのもとに来ることを待っておられます。私たちが今こうして主の御言葉を聞くことができるのは、主イエスが私たちを愛し、私たちが休ませたいと招いておられるからなのです。主イエスは私たちに本当の安息と新しい力を与えたいと願っておられるのです。

さて、主イエスがこの御言葉を弟子たちに語られた時はちょうど安息日で、主イエスは弟子たちと共に麦畑の中を通られました。弟子たちは空腹だったので麦の穂を摘んで食べ始めました。すると、パリサイ人たちがこれを見て、「あなたの弟子たちが、安息日にはしてはならないことをしています」(12章2節)と言って、主イエスを非難しました。安息日には一切の労働をしてはならないと律法に定められていましたので、麦の穂を摘む(脱穀する)ことも労働に値することから、律法違反だと責められたのです。これに対して、主イエスはきっぱりと、「人の子は安息日の主である」(12章8節)と言われました。「人の子」(主イエスご自身のこと)が来た目的は、人々に本当の安息を与えるためであることを明らかに示されたのです。

確かに、律法は聖なるものです。しかし、主イエスは律法を振りかざし罪人をただ責め立てるようなことはなさらないのです。主イエスはどこまでも「柔和で心のへりくだった者」(11章29節)として私たちに近づいて来られます。主イエスは、律法を守れない罪人を深く憐れみ、そのためにご自分の命まで捧げて下さる神様な

のです。だから私たちは心にどんな責められることがあろうとも、主イエスの憐れみと赦しのもとで安らぐことができるのです。

弟子たちには帰る家がありませんでした。主イエスと共に町や村を旅しながら、人々に神の国のよい知らせ伝えていたからです。この日も朝から何も食べていなかったのでしょうか。そして、主イエスは弟子たちの苦労をよくご存知でした。だから、たとえ安息日の掟を破ることになっても、彼らの飢えを満たし、その疲れを癒してあげたのだと思います。主イエスはこのように私たち一人一人にも関わって下さいます。私たちが疲れていないか、心が飢え渴き、傷ついてはいないか、私たちの必要をご覧になり、それを満たして下さる神様なのです。

「わたしにくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。」(11章29節)「くびき」(軛)は、牛や馬の首にあてる横木の事です。当時は、牛や馬に「くびき」をつけて鋤や荷物を引かせて農作業をしました。主イエスは大工をされていたので、おそらく「くびき」を作られたこともあったでしょう。主イエスは牛や馬の体が痛まないように体にピッタリと合った「くびき」を作られたと思います。主イエスは、私たち一人一人のことをよく考えて、私たちの体に合った「くびき」を用意しておられるのです。

犬がリード(引き綱)を無理に引っ張ったり他の犬に吠えたりするのは飼い主を信頼できず、いつも緊張しているからだと言いました。しかし、利口な犬は飼い主を信頼し、飼い主のリーダーシップに任せて安心して外を歩くことができます。私たちも、自分の力で無理矢理前に進もうと頑張っているといつか疲れてしまいます。もし、私たちが主イエスを信頼し、主イエスのくびきを負い、主イエスのリーダーシップに任せるならば、私たちの魂は安らぎを経験することができます。主こそが私たちに緑の牧場と憩いの水際に導いて下さるからです。たとえ敵が襲って来ても、主が私たちのために戦って下さいます。主を信頼しましょう。私たちがいつでも安心して生きられるように、主は今も私たちに招いておられます。

(記 村上修平)

